Japanese Physical Therapy Association

591

臨床研究における痛みの評価方法 PAINにおける最近の傾向

柳田光輝[1)]・平野幸伸[2)]・長谷川祐一[3)]・柴山　靖[4)]
佐野哲也[0)]・張本浩平[5)]・銭田良博[0)]・有馬征宏[0)]
石黒祥太郎[0)]・高木健次[5)]・鈴木重行[5)]

1) 愛知県厚生連愛北病院
2) 愛知県立尾張病院
3) 城見整形外科クリニック
4) 佐藤病院
5) 名古屋大学医学部保健学科

key words
疼痛評価・文献検索・傾向調査

【はじめに】痛みは臨床で遭遇することの多い主訴の一つである。痛みに関する研究報告は多数あり，臨床的な痛みの評価は多岐に及んでいる。しかし，痛みの臨床研究において先人たちがどのような評価方法を用いてきたかを統計的に観察した論文は少ない。そこで我々は痛みの臨床研究の先行調査として，世界疼痛学会学術誌のPAINに1999～2001の2年間で掲載された論文のうち臨床的研究のみを選択し，代表的な指標は何かを調査したので報告する。

【対象】1999～2001年に学術誌PAINに掲載された論文の中から臨床的なものを選択し，タイトル，目的，対象，実験内容，痛みに関係する評価方法とその使用方法等について痛みの指標を中心に和訳した。訳した論文は56個であった。

【結果と考察】1．指標使用数　56論文中の指標総数は193個，123種類であった。1つの論文中に使用された指標数は1～8個であった。トップは1論文中1指標と3指標使用で12論文，以下5指標9論文，2指標8論文，4指標6論文，6と7指標4論文8指標1論文であった。1指標使用の12論文は，新しい指標に対しての妥当性を検討しているものであった。2．各指標の登場頻度　1論文のみで登場した指標が98個（79.7%），2論文で登場した指標が13個（10.6%），3論文以上で登場した指標が12個（9.8%）であった。1論文でしか登場しなかった指標は，専門的で特殊なものが多かった。3．指標の内訳　3論文以上で登場した指標の内訳は，VASの19論文を筆頭にMPQが13論文，NRSが8論文，VRSとCSQが5論文，STAIが4論文，PTM，EMG，HADS，HR，SF-36，CES-Dがそれぞれ3論文であった。4．指標の分類　指標は，（1）痛みの強度（2）痛みの質（3）性格や精神状態（4）機器を用いた生体反応（5）QOLを評価するものに分類された。各指標の使用頻度は（1）は56論文中32論文（57.1%），（2）は13論文（23.2%），（3）は15論文（26.8%），（4）は9論文（16.1%），（5）は3論文（5.4%）であった。5．各指標の対象とする痛み分類　対象者の痛みを急性痛と慢性痛に分けてみると（1），（2）は疼痛の種類に関係なく使用されていた。（3），（5）は主に慢性痛を持った対象に使用されていた。（4）は実験的に作成された急性痛で使用されていた。以上のことから，実際の臨床研究には，痛みの強度と質を使用頻度の高かったVASとMPQで評価し，さらに急性痛であれば生体反応を反映するような指標，慢性痛であれば気質や精神状態，QOLまで含めた指標を組み合わせることで痛みの全体像をとらえるのが望ましいと考えられた。

592

転倒してもケガを伴わなかった高齢者の特徴について

樋口由美[1)]・須藤洋明[2)]・花崎祥子[2)]・田中則子[1)]
淵岡　聡[1)]・林　義孝[1)]

1) 大阪府立看護大学医療技術短期大学部理学療法学科
2) 老人保健施設まほろば機能訓練室

key words
転倒・高齢者・調査票

【はじめに】高齢者は転倒により大腿骨頸部骨折に代表される重篤な怪我を被りやすく，それをきっかけにQOLの著しい低下をきたす場合が少なくない。高齢者の転倒予防が検討される中，その対策の一つとして身体機能の維持向上を目的とした転倒予防体操が実施されているものの，その裏付けに乏しいものが多い。本研究は，転倒予防及び転倒による重篤なケガを防ぐための運動を選択する前段階として，転倒経験者，特に転倒にケガを伴わなかった施設利用高齢者の特徴を明らかにすることを目的とした。

【対象および方法】老人保健施設の利用者90名（男性22名，女性68名）を対象として，転倒および身体機能に関する自記式調査をおこなった。全ての対象者は，厚生省の痴呆性老人の日常生活自立度判定基準においてランク2以上のものとし，ランク2の者には理学療法士または施設職員が聞き取り，もしくは記入をおこなった。調査項目は，過去一年間の転倒の有無，転倒によるケガの有無，ケガの種類，転倒への意識，過去一年間の疾患，健康意識，睡眠状態，歩行能力，脚力，視力，住環境の状況，外出（交流）頻度など26項目とした。対象者90名を転倒なし群（n=52），転倒ケガなし群（n=20），転倒ケガあり群（n=18）の3群に分けて分析した。

【結果と考察】転倒なし群（84.2±7.2歳），転倒ケガなし群（81.2±6.1歳），転倒ケガあり群（81.0±7.1歳）の間には，年齢，性別，痴呆度，歩行能力において有意差は認めなかった。3群と有意な関連を示した項目は，片脚バランス能（$p<.001$），握力（$p<.05$），視力（$p<.05$），転倒への不安（$p<.01$），睡眠薬の使用（$p<.05$）であった。残差分析の結果，転倒ケガなし群は有意に片脚バランス能の低下，握力低下，視力障害の自覚，睡眠障害を示した。一方，転倒ケガあり群は有意に転倒への不安が高いが視力障害の自覚は少なかった。転倒なし群は有意に片脚バランス能・握力が良好で，転倒への不安は少ない結果を示し，文献的な報告と一致した。有意傾向（$.05<p<.10$）を示した項目は，健康意識，歩行速度，過去一年間の高血圧症の治療，5種類以上の内服，であった。さらに，片脚バランス能，転倒への不安，外出頻度，健康意識，過去一年間の高血圧症治療を説明変数とした，多重ロジスティック回帰分析を行った結果，転倒ケガなし群は転倒なし群に比べて有意に片脚バランス能が低く（オッズ比0.12），転倒ケガあり群に比しては有意に転倒不安は少ない（0.07）一方，外出を避ける（6.35）傾向を認めた。以上の結果から調査票にみる，転倒にケガを伴わなかった高齢者の特徴は，片脚バランス能の低下がみられ，視力障害を含め自己の機能低下を自覚しており，日常の行動にも気遣う様子が想像された。今後，実際の身体機能調査を予定している。

NII-Electronic Library Service